
BATTLE WORLD

ヴィス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BATTLE WORLD

【Nコード】

N8845U

【作者名】

グイス

【あらすじ】

天月劔飛は真っ白い世界にいた。

それは、BATTLE WORLDへの入口…

何なんだよさつきから…

「ようこそ！バトルワールドへ！」

突如現れた男が言う。バトルワールド？

視界を意識すれば、乗り物が沢山ある。

いや、その前に…

「誰だおまえ」

「申し遅れました。私、バトルワールドの長をやっております。レンカと申します」

何がレンカだ。馬鹿馬鹿しい。

「ではまず、このバトルワールドのルールを説明いたしましょう」

パチンと指を鳴らすと、モニターから『ルール』と書かれた画面が出て来る。

なになに…

1 参加する者は必ず腕輪を装着しなくてはならない

2 負けたものは死

3 仲間、裏切り、スパイなどなんでもよし

4 最初は必ず職業選ぶ

なんだかわけがわからんな。
全く、こんなことやって何が楽しいのか。
そもそもなんで俺なのか。

「わからないようなので捕捉をさせていただきます。あなたは選ばれたのですよ」

「それがわけがわからないんだ！なんで俺なんだ！」

男：いや、レンカは何も言わず、姿を消した。
くそっ！

しばらくすると、アナウンスが掛かる『剣飛さま、早くお乗りください』と。

「何で俺の名前知ってんだよ」と俺は呟き、ジェットコースターみたいな乗り物に乗る。

俺はドキドキしていた。でも、その裏腹に不安がある。

そりゃそうだろう。なんせ、いきなりなんだからな。

『GO!』とアナウンスが入ったとたん乗り物が動き出す。

乗り物のなかのモニターに職業と書かれた画面あるのに気付く。
そっぴゃ、職業を選んだっけ？

迷いながら選んだのは『召喚術士』
理由？ そりゃ、カッコいいからだよ。

『OK』といわれ、乗り物と一緒にトンネルを潜り抜ける。

数分後、いきなり停まって投げ出させる。

いってえ〜、頭モロ打ったよ。

……………あれ？ここって…

「…草原？」

何で草原なんだ？

まあ、考えても仕方ないか。

「？なんだあれ」

小さい塊が浮いているんだが…

なんだあれ。っていうかどうやって召喚出来るんだ？

『それは無理です。今のあなたは手元にモンスターがいない状態ですから』

いきなりアナウンスされる。

結構今のビビったぞ。

さて、どうするかな。今の俺には武器も何にもない。

かといって逃げるわけにもいかない。あんなわけのわからんモンスターにビビっては男じゃない！

何か！ 何か棒は…

「どうして」

「え？」

一瞬、何が起こったのかさっぱりわからない。でも、これだけは言える。

モンスターが消えた。

「君、大丈夫？」

「え？あ、はい」

手を差し伸べてくれたのは女性だ。しかも、すらりとしたボディ。まさか、この人が俺を助けてくれたのか？

「こんなところで、何も持たないでいるなんて危ないよ」

「ありがとう」

「私は咲彩、ほしなサーヤ星菜咲彩。パラディン聖騎士だよ」

「俺は劔飛、あまつぎケント天月劔飛。サモナー召喚術士だ」

「ところで君はサモナーになったの？サモナーってのは、まずモンスターと契約しなきゃいけないんだよ」

「え？そうなの？」

知らなかった。俺はRPG系のゲームはしたことないからな。とはいえ、格ゲーも好きってわけじゃない。やるとすれば育ゲーぐらい

だ。

自慢ではないが、そういうのは得意だ。

「ねえ、私と手を組まない？」

唐突に言う。

確かに仲間などはOKって言われたが、見ず知らずの人とは手は組めん。

いつ裏切るか解らないし。

そもそも俺はこんな馬鹿らしいモンに付き合っではいられない、帰って学校に行かなくちゃいけないし。

「私が居なければあなた、死んでいたわよ」

あんなわけのわからんモンスター…しかも弱っちそうな奴にやられるわけない。

いや、やられたとしてもダメージないはずだ。あつたとしたら、5か10ぐらいだろう。わからんが。

「あれ、毒持ちよ」

咲彩^{サーヤ}が指を指す。

向けた先は骨。あれはなんの骨だ？

見たところ人つぽいが…

さすがに人だとマズい。

「……人よ」

「え？」

案の定だ。でも、俺は大丈夫だよな！ 友達から訊いたが、俺みたいなジョブは防御とHPが高いって言ってるし！
うん、大丈夫大丈夫！

「今のあなたはLV1、HPはだいたい15あたりだから…2回ぐらい攻撃を受けたら死ぬわ」

「……」

まさか、そんなに弱いとは…

「だから、私と手を組むの。そしたら強いモンスターも手に入れられるし、私もLVがアップする。一石二鳥じゃない」

この女の言うとおりがもしれない。

……ま、暇潰し程度にはなるか。

どうせ戻れるかわからないだし。

「わーたよ」

しぶしぶハイタッチして歩き出す。

これから俺、劔飛と咲彩との冒険が始まる。

契約

俺がバトルワールドに来てから2日たった。

寝泊りは当然野宿だ。とはいっても、野宿は1日目だけどね。

そっぴゃ、咲彩は何でバトルワールドに来たんだ？

まあ、どうせあの男から強制的に連れてこられたんだろ。

しかし、俺の契約するモンスターは何になるのか。ザコいモンスターだったらいらないし。

いや、でも実際弱いやつほど強くなる確率が高い。地道に育てていくしかないな。

「劔飛、モンスターよ」

咲彩は戦闘体勢に入る。

くっ、まさか女子を頼りにするとはな。俺ながら情けない。

相手は鳥系のモンスター、バーディア。

ちっこくて素早い代わりに攻撃弱い。多分、咲彩ならやってくれるだろ。

「はあ！」

咲彩の大剣がバーディアに向かって振り上げられる。

しかし、バーディアは後ろに下がり、空へと飛んだ。

それを平然と見ている咲彩。

何してんだよ！

「……ねえ、あの子欲しいとは思わない？」

咲彩が突然言う。何言ってるんだ？確かに欲しいけど、どうやって契約すんだよ。

俺はそんな知識はない、そもそも何であるのバーディアのことがわかったさっぱりだ。

なんか、モンスターなら何でも知ってる感じがする。

「大丈夫、あんたなら出来る」

「何を根拠に…」

いや、俺はサモナーなんだ。やらなくてどうする！やり方は俺の中の脳が教えてくれるはずだ。

俺は神経を自分の脳内に集中する。

さあ！教えてくれ！

よし、やり方はわかった。

「咲彩！まずバーディアを弱らすんだ！」

咲彩は小さく頷いて、バーディアに斬り掛かる。

よし！攻撃が当たった！これでだいぶん弱ったはずだ。

「我は召喚術士、汝の名はバーディア、汝は我と契約し、我が剣となり盾となる」

魔法陣に俺とバーディアが包まれる。あと…もうちょいだ。

スパアアアンと音がすると、バーディアの姿が見当たらない。どうやら成功したようだ。

……結構、疲れるんだな。

「よかったね劔飛！」

「ああ」

やべっ、膝がガクガクだ。立つのもキツいや。

「んっ」

咲彩？

いきなり腰を降ろしてきた。どういうことだ？

「乗りなさいよ」

「は、はあ？」

何言ってるんだよ！ 何で俺が女に担がれなきゃいけないんだ！
大体俺は…

俺が思いかけたとき、咲彩が言う。

「あんだ、今立ってないんでしょ？しょうがないじゃない」

有無も言わずに背負いだした。

ちよっ！ハズいって！

「ごちゃごちゃ言わない、行こう」

この天月劔飛、一生の不覚！

咲彩におんぶされて数分、やっと村に着いた。
見たところ結構荒れている村だな。

「盗人だ！捕まえる！」

「「え？」」

俺と咲彩が振り向くと、その盗人がこちらに向かってきた走ってきた。
た。

よし、さっき契約したバーディアで…

「我は召喚術士。我の声で汝は火炎の中からその姿を現す。バーディアア！」

魔法陣からバーディアが現われる。

さて、行くぞバーディア。

「バーストフレイム！」

バーディアは炎を纏い、盗人に向かって突出する。

「っつ」

「何？」

避けられた…そんなバカな！

何なんだこの盗人は。バーストフレイムを避けれるなんて…！

「流斬！」

大剣で横に斬り裂く、が…

「よっ、甘い甘い」

咲彩のわざでもダメか。ホントに何モンなんだ。咲彩も落ち込んでるみたいだし。

「えっ？もう終わり？」

コイツ、舐めやがって…！

ぶっ飛ばす！絶対えぶっ飛ばすうう！

「バーディア、えんかい炎灰！」

バーディアの翼が鋭い炎と化す。そして、素早く貫く。

「よっと…ニヒヒ、お前ら弱いね」

「チッ」

また避けられた。どういう…いや、考えても時間の無駄か。

「やるじゃない」

「咲彩！」

何のんきなこと言ってる！相手は強いんだ。

……そうか、そういうところか。咲彩はコイツを…

「ねえ、あんた名前は？」

「俺様か？俺様は御纏ごでんいちほつ一初いちつてんだ」

「そう。なら、私たちの仲間にならない？」

お、おいおい…

「はあ？」

そりゃそういう反応するよ。

でも、確かに腕はよさそうだが、俺らの仲間になるのは…

「無理に決まってるんだろ？俺様は盗賊シーフだ。お前らに付いていくほど人間出来ちゃいないんだよ」

ま、妥当だね。俺もこんな奴仲間にはかないもん。

「そう、残念ね。君とならいいパーティーになりそうだったのに。行きましょ。劔飛」

「あ、ああ」

俺と咲彩は村の宿屋で体を休めた。

ふう、今日1日大変だったな。バーディアとも契約したし、これから旅をしていく仲間だ。

「頼むぜ、バーディア」

契約（後書き）

（前衛系）

ファイター・ウォリアー

戦士

アマソネス・アマゾン

女戦士

バーサーカー・ヘルセルク

狂戦士

マジックウォリアー

魔法戦士

ソドマン

剣士

グラディエーター

剣闘士

エグゼキューション

死刑執行人

ソルジャー

兵士

ガード

衛兵

ドラグーン

竜騎兵

インベリアルガード

近衛兵

ディフェンダー

防衛者

ガードリアン

守護者

ジェネラル

将軍

ナイト・キャバリアー・シュバリエ・リッター

騎士

パラディン

聖騎士

テンブルナイト

聖堂騎士

クルセイダー

十字軍

バンディット

山賊

海賊（パイレーツ・バッカニア・バイキング・コルセア）

マーセナリー・ハイアリング

傭兵

バーバリアン

蛮族

ジエノサイダー

虐殺者

侍

ロード

ハイランダー

マーチャント
商人
クラフトマン・クリエイター
職人
ブラックスミス
鍛冶師

格闘系

武道家

モンク

拳聖

空手家

ごろつき

喧嘩師

軽業師

気功師

護身術士

パンクラチオン

グラップラー

ストライカー

軽装・中衛系

盗賊
シーフ・ロバー・ルーター・ブリガンド

ならず者
ローグ

追跡者
チェイサー

暗殺者
アサシン・スタッパー

野伏
レンジャー

忍者
ヘガー

乞食
シフシー

放浪者
バード・ミンストレル・ドルバドール

吟遊詩人

弓使い（ボウマン・クロスボウマン）

アーチャー・シューター

射手

ハンター

猟師・狩人

スナイパー

狙撃手

（魔術師系）

見習い（アプレンティス）

ハーミット

隠者

ウオーロック

男の魔女

ウィッチ

魔女

魔術師（ウィザード・マジックユーザー）

ソーサラー・ソーサレス

妖術士

シャーマン

呪術師

イリユージョニスト

幻術師

セイジ・ワイスマン

賢者

獣使い（ビーストテイマー・ビーストマスター）

スカラー

学者

フオーチュンテラー

占い師

メイジ

アークメイジ

バトルメイジ

メイガス

デアボリスト

ウイスパー

囁く者

サモナー

召喚術士

ネクロマンサー

死霊術士

エレメンタリスト

精霊術士

アルケミスト

錬金術師

アストロジスト

占星術士

（僧侶系）

ドルイド僧

薬草使い（ハーバリスト）

クレリック
牧師

祈祷師・退魔師・除霊師

ハイエロファント
法皇・教皇

ハイプリーステス
女教皇

カーディナル
枢機卿

ビショップ
司教

プリースト
神父・司祭

ディーコン
助祭

アコライト
侍祭

この中ジョブを選んで、名前を考えて下さい。

必要な事項は名前、性別、ジョブ、備考などを書いてくれるとありがたいです。

姫の救出へ！

「さて、そろそろ行こう」

とある朝、咲彩が言う。確かに、もう出発しなきゃな。シーフがいる村なんて長居はしたくない。バーディアの鍛練もしなきゃいけないし。

「お世話になりました」

「気を付けるんだよ」

「はい」

宿屋のおばさんにも言ったし、後はこの村を出るだけだ。

咲彩は「あの盗賊の子、欲しかった…」とか言ってる。いやいや、さすがにあいつを仲間にするのは俺が困る。なんか体が拒否反応するんだよ。

歩いて数分、俺は怪しげな影を見つけた。誰だ？

「おい、こそこそやってないで出てきたらどうだ？」

「ばれましたか」

出てきたのは黒い帽子を被った女。

見た目からして魔女ウィッチだろ。

「名を名乗れ」

咲彩が言う。

しかし彼女は、何も言わずこちらに向かってき歩いてきた。

「私は魔女、^{ウィッチ}ケイト＝ミドルトンですわ」

「で、そのケイト＝ミドルトンが俺らに何用だ？」

ケイトは水晶を出すと、その中に文字が浮かび上がる。
ま、ウィッチだから当然か。

「…これって…」

咲彩が驚く。無理もない、王の娘が連れ去られたみたいだからな。
でも何で俺らなんだ？普通強え奴を呼ぶはずなんだが…：…まあいいや。

「では、付いてきてください」

ケイトの言うとおりに付いていくと、デカイ屋敷にたどり着いた。
結構デカイな…相当な大富豪だろう。

「お入り下さい」

「「おお〜」」

中も結構広いな。さすが王様ってところか。

ケイトが「こちらへ」と言われ、着いたのが小さい扉。

俺ん家に比べりゃ断然でかいけどな。

「ん？何だお前ら」

現われたのはラフな格好した奴と…

「あ、お前ら！」

「いつかのシーフ！」

そう、なぜかあん時の盗賊^{シーフ}がいる。

とうとう捕まったか？

等と考えていると、ぬっ、と鏡が出される。

咲彩は「ヒイツ」と悲鳴を出し、俺の後ろに隠れる。

コイツ、怖いのが苦手なのか？

「おっちゃん、こんなとこで何してんだ？」

ラフな格好した男が言う。

ま、俺としても訊きたいしね。

「ワシの名はユウキ・カタノ、見ての通り王をやっておる。しかし、ワシはオーガに娘を攫われて、拳げ句の果てに鏡に閉じ込めたのじや」

おいおい、そんな童話の中の話じゃないんだから……いや、今の俺らにはモンスターとかいるしな。

そもそも王はそんなことでウソを付かないはずだ。

第一、よくよく見ると結構強かったシーフもいるし、強そうな男もいる。

俺らはオーガを倒すべく為の準備をした。

「そついや、お前なんて言つんだ？」

シーフが言う。

確かにそつだ。連携の時に呼び合わないと困る。それに、自己紹介ぐらいしないと。

「俺様は御纏一初。盗賊だ」

「俺は吾神^{あがみレント}鍊斗。ジヨブは鍊金術師^{アルケミスト}。よろしくな」

「私は星菜咲彩。聖騎士^{パラディン}よ」

「俺は天月劔飛だ。ジヨブは召喚術士^{サモナー}」

それから俺らは次々と自己紹介をしていき、意外なことが発覚した。それはこの鍊斗って人は12の時からバトルワールドにいるらしい。まあ、見たところ強そうって思ったけど、案の定とは…

「おーい、武器改造終わったぞー」

鍊斗さんが叫ぶ。

鍊斗さんはアルケミストだから俺らの武器を改造してくれてるんだ。結構いい人だし。

で、俺はバーディアしかいないから改造出来ない。

咲彩は冷気を纏った大劔『アイシクル』、一初は雷を纏った短劔『

ざまあだな。

「おい、どうでもいいが進まんのか？」

っと、そうでした。取り乱してしまっただ。

こうして俺らはオーガを倒すため、洞窟に足を踏み入れる。

虐殺者

「ねえ、錬斗さん。錬斗さんは何で姫を助けに？」

「ん〜、俺あは曲がったことが大ッ嫌いなんだよな。王をあんたとこへ閉じ込めて何がいいんだか」

「コンマ置いて「はあ」と言う錬斗さん。結構正義感が強いんだ。それに比べてこの盗人は何で参加したんだ？ま、どうせ面白半分で来たんだろう。」

「ヘッ、俺様はオーガをぶっ倒して強くなる！」

何だ。意外と普通なんだな。

「あら、私と同じ理由とはね」

咲彩もこの盗人と同じ理由か…なんか分かる気がする。俺もこの世界ワールドに来たからには少しでも強くならなくちゃな。などと考えていると、早速現われたのは漆黒と深紅の翼をもつコウモリ、コクバッド。確かコイツは…

「たありゃあ！」

俺がこのモンスターを確認する前に、一初は攻撃を仕掛けた。このモンスターの特徴…それは水の力。となるとバーディアはキツイ。なら、咲彩の『アイシクル』だ。

「咲彩、コイツは水の力を持っている。今の咲彩が適任だ」

咲彩は「こくん」とうなずき、力を溜める。
一方一初はコクバッドと乱戦している。思った以上に強いのか、手も足も出てない。

「退いて！」

咲彩が叫ぶと一初は横に避ける。そして咲彩は退いたのを確認して真上にジャンプ。

「我が冷気は汝の命を奪わんとする（オア・フリンギス・イト・レピット・アニマン・トゥーム）。吹雪の斬撃！」
レジェン・イン・スノーストーム

コクバッドめがけて吹雪のような斬撃が襲い掛かる。
よし、これでなんとか倒せた。

「ふう」

さすが聖騎士だ。疲れは少しだけとは。
んで、一初の様子を見ると結構疲れてるっぽい。まあ、コイツにとっては対モンスターは初めてだから仕方ない。
そして俺らは次々と洞窟の奥に進む。

「行き止まりだな」

錬斗さんの言うとおり、目の前は壁で、何も仕掛けなどなさそうだ。

「仕方ない戻るか」

と、その時。ギギッと扉が開く音がする。隠し扉か。

中に入ると辺りが暗くてよく見えない。

「な、なあ。あれ人じゃないか？」

一初が言う。俺も目を凝らしてみると、男性が椅子に座っているのが見える。

確か俺らはオーガを倒しに来たはずなんだが…

「フンッ」

そういつて放り投げたのは…

「オーガの首……」

多分、錬斗さんか一初が言ったんだろ。俺は驚き過ぎて聞く耳持たなかった。

いや、今はそこじゃない。

相手はあのオーガだ。例えどんなに強いヤツが1人で戦っても無傷で生き残れる奴は居ない。

しかもこの男は返り血を浴びている。否、浴びまくっている。

「俺様、あの男見たことある……」

「え？」

少々びびりながら言う。そう言えば俺も見たことがあるような……

「劔飛、咲彩、一初。逃げろ……」

「なっ！？そんな…錬斗さんを置いて逃げるなんて」

「コイツは全国指名手配犯。無差別殺人鬼……」

男を見て錬斗さんは言う。

「岩見祥吾だ！」

そう、この男は錬斗さんが言う無差別殺人鬼、岩見祥吾。数年前脱獄して行方不明となっていたが、まさかこんなところにいるなんて……！

「まずは……誰から殺る……？」

う、動けない……体が……

「まずはお前からだ……」

サツと現れたところは一初だ。くそっ！ 身体！ 動け！

岩見は一初の頭を握り締める。くっ、こんな時に何で……！

「あ……ああ……くっ……」

何で動かないんだよ！

「俺の眼は誰もが跪く……お前らはここでコイツの死刑を見ている」

出てきたのは血塗れの刀。

コイツ、まさか一初の首を刎ねるつもりじゃ……！

亡くなった友のために（前書き）

今回は雨季さんが投稿してくださったオリキャラが出ます。

亡くなった友のために

一初…俺はなぜお前を守れなかったのか…

俺は弱い。悔しい。何も出来なかった故にお前を死なせちゃまって…

もう、いやだ。俺はもう戦いたくない。もう誰かの死は見たくない。抜け出したい。

もう……いやだ……

「劔飛…」

「劔飛。立ち止まっている時間はない。オーガを倒したが、王の娘を助けに行かなくてはならないのだ。気持ちは分かるが、いつまでもここにいたら一初だって安らかに眠れない」

「何で……何でアンタは人が死んだのに平気でいられるんだよ！」

「平気なわけないだろ！」

鍊…斗さん……？

「俺らがやらなきゃいけないことはなんだ？一初の墓の前でメソメソ泣くことか？違うだろ！俺らは姫を助け、王を鏡の中から出すことだ。違うか？」

そうだよな。いつまでもメソメソ泣いていたら一初に笑われちゃう。俺は鍊斗さんの言葉で自分が何をしなきゃいけないのか分かった気がする。

まずは姫を助け、王を鏡の中から出す。考えるのはそれからだ。それに…あの岩見ってヤローをぶん殴らなきゃ気が済まねえ。

今の俺は無理だ。それは事実。だが、そこから強くなるってこと証明してやる。

その為にも仲間を増やしていこう。

「ねえ劔飛。あそこの扉って…」

咲彩が指差したのは奥にある扉だ。ここに閉じ込められている可能は大。なら、急いだ方がいいな。

俺と鍊斗さんは扉の把手に手を掛けて、一気に引く。すると、目の前に扉がうずくまっていた。

中は暗いし少し寒い。それにクモやら虫がちよこちよこ歩き回っている。なぜ姫をこんなところに閉じ込めたのかは不明だ。だが、これで姫は助けた。後は王を元に戻すのを…アレ？

「なあ、咲彩。王を元に戻す方法」

「知らない」

だよなあ、どうすりゃいいんだよ。オーガは死んじまったし…はあ、あの岩見ってヤロー…それを知りながらアイツは…！

「あ、あの…！」

突然姫がみんなに言う。「もうパパは鏡から抜け出したよ」と。俺らは急いで屋敷に戻り、王の無事を確認する。

すると王は既に鏡から出ていて、ご飯をもりもり食べていた。

つまりあのオーガを倒せば鏡から抜け出せるって事ね。

その晩王は俺らにご飯をご馳走してくれた。結構美味かったりして。それからこの屋敷…否、この町を出る日が来た。

鍊斗さんは俺らと共に旅をする事になった。いきなり「俺を仲間に

してくれ！」なんて頼むからビックリした。
咲彩は引き続き俺と一緒に旅をする。俺としては嬉しいことだ。『仲間』が出来るんだからな。だが、その裏腹に『裏切り』という行為も考えられる。
裏を掻いたり掻かれたりのバトルワールド……やってやるよ。

俺らはシラマ砂漠を歩いている。確か、この先にミズナ村という村があるそうだが……ホントにこのルートで合ってるのかよ。辺りは見回しても地平線だし、何も無いじゃん。
そんな時、1人の左腕がない男性と会う。その姿はレザー装備にボロボロのスカーフとマントを身につけている。髪は金髪で背が高い。恐らく外人だろう。

「初めまして、ロン・ハワードです」

「こちらこそ、天月劔飛です」

「吾神鍊斗だ」

「星菜咲彩よ。よろしくね」

この男の用件は俺らと同じミズナ村を目指している。だが、一向にミズナ村が見えないから不安になり、同行をお願いされたのだ。確かに、進んでも進んでもミズナ村に着かない。これじゃ俺らは飢え死にだ。それだけは回避したい。

「感謝するぜお前ら！」

ロンが俺らと同行してから数時間。さすがに疲れてきた。咲彩の『アイシクル』だけじゃ厳しいよ。それにこの状況でモンスターが出たら厳しい。今の俺らはこの暑さで体力を奪われているんだ。そこにモンスターが来たら一溜まりもない。

「ん？」

錬斗さんがいきなり停まり、息を潜めた。何か気付いたのか、武器ホイを構える。

咲彩とロンも、錬斗さんに続き武器を構える。なら、俺もバーディアを喚びだそう。

「我は召喚術士。我の声で汝は火炎の中からその姿を現す。バーディアア！」

それぞれが息を殺し、モンスターが来るのを待つ。

そこで1つ疑問が出来た。

それは…

『ロンは片腕だけで戦えるのか？』

ロンの武器は大剣。故に『片腕だけでその大剣を操れるのか』と俺は疑問視してしまう。

だが、そんなことも忘れ去られるようにモンスターがウジャウジャ出て来た。

あのモンスターの名は『クラブヘッド』。砂漠で生息するのが特徴な力ニ。

あの前脚のハサミに挟まれたら木っ端微塵だ。

それにあのカニの能力は、地面に潜り、相手の真下から引きずり、地面の中で食すというえげつなことをするモンスターだ。

「相手は50…いや、60体か……」

ロンはぶつぶつと言って、ある事を言う。それは…

「俺ら4人なら30分で行けるだろう」

俺らの実力を知らないで言ってるのかはわからないが、たった30分で60体のモンスターを倒せるのか…？ いや、倒してみせる！俺とて無駄にここまで歩んできたわけじゃない。ロンの言うとおり30分で終わらす。否、30分以内で終わらす！天国いる一初に笑われないように、絶対30分以内に終わらしてみせる。

亡くなった友のために（後書き）

まだまだオリキャラを募集しております。

必須項目は

名前

年齢

性格

生い立ち

容態

武器

防具

能力（二次小説ではないので、チート過ぎはダメ）

例：何でも武器、道具を作れる等。

はダメ

職業

です。

上記の通りに書いてくださらないと、混乱してしまいます。

ちなみに投稿して下さったオリキャラは、どこで使うかは秘密です。

使わないことはありません。

最後に天月劔飛の年齢は18、星菜咲彩は17です。

判らないことがあったら、遠慮なくメッセージを下さい。

では、投稿待ってまゝです。

V Sクラブヘッド

「バーディア！バーニングスラッシュだ！」

俺とロンと錬斗さんと咲彩はクラブヘッドと戦っている。

俺とロン、錬斗さんと咲彩のコンビで倒すことに決まった。さて、コイツの戦闘スタイルをお手並み拝見と行くか。だがその前にコイツらをなんとかしなくちゃな。

つつてもこれじゃキリがない。手っ取り早くコイツらを倒す方法を見つけないとは。

俺は必死に考えを探ってみた。こういう時のサモナーだろうが！
くそっ！

「………待てよ………」

相手は主に地中で暮らしている。ならば地面ごと叩けばいい。だが、どうやって地面ごと叩く。生憎俺のバーディアじゃ力不足だ。くっ、こつという時に地のモンスターが欲しい。いや、無い物ねだりしてる時間はない。他に方法を……

「！」

「たああああ！！！！！！」

ロンは片手だけでクラブヘッドを振り払う。

すげえ、片手であの大剣を軽々と……それにあの破壊力……いけるかもしれない。

ロンのあの破壊力があれば倒せるかもしれない！

「ロン、話がある」

劔飛SIDE OUT

ロンスIDE

ケントが俺に話があると言って、側に寄ってきた。

耳を傾けると、俺にあることを言った。それは『地面を叩け』という提案。

ケントのことだから何かしら策があるのだろう。

俺は深呼吸をして、大剣を構える。

「だいしんがい大震鎧！」

思いっきりジャンプして、勢い良く地面に突き刺す。

すると、クラブヘッドが沢山出てきて宙を舞う。なるほど、ケントはそれを予想していたのか。

俺が驚いていると、ケントはバーディアに攻撃の指示を出す。

「バーディア！えんしょうれつ炎璋烈！」

バーディアの翼とクチバシが燃えだして、空中にいるクラブヘッドをある程度倒した。

どうしてある程度なんだ？ まだいるだろう。

「後はお前の仕事だよ。ロン」

そついう事か…なら、お言葉に甘えて…

「スピードダム…！」

素早さが上がる術を自分に向け、横に構ええる。

そして1コンマ置いて、高速で斬り付ける。俺の能力はちょっと厄介だ。スピードアップならスピードアップ。と、1つしか出来ないから何回も何回も斬り付けなければならない。

よし、LAST！

「はっ！」

最後の1体を渾身の一撃で倒した。

ふう、やっぱり疲れる。あまり使わないほうがいいな。

RON SIDE OUT

錬斗SIDE

「たああありゃああ…！！！！！！」

次々と俺のハンマーで殴り飛ばす。ハッ！ アルケミストだってやるときゃやるんだよ。

普段は武器を鍛えてる俺だが、ここぞと言うときのために鍛えてよかった。

チラ見で咲彩の方を見る。

すると咲彩はクラブヘッドを容赦なく斬り刻む。さすがパラディンと言ったところか。

「昇黎氷斬！」
しょうりひやうせい

咲彩は2回斬り上げ、そのまま地面に叩きつける。
全く、あの小さい身体にどんなパワーを秘めているのやら。
それよりもあのクラブヘッドのハンマー…俺の武器を進化するのに
最適だ。よし、持って帰ろう。

その前にクラブヘッドを倒さないと武器が造れない。倒して強えハンマー造る。

「峨梁塵碎！」
がりやうてんさい

ハンマーを回転しながら叩く。一体一体しか倒せないが、攻撃力がかなりある技だ。

もうちよつと鍛えたほうがいいな。それに改良の余地がある。あと、この『ポイズター』も改造したら、より威力が増すだろう。
さて、劔飛達の方はどうかかな？

そう思ってそっちに目を向けると、すでに全滅していた。すっげえ、こっちはまだまだだっただけなのに。それにロンってヤツ、何者なんだ？
片手だけであの大剣をフツーに振り回すなんて有り得ないだろう。

いや、実際ここにいるんだ。否定出来ねえか。

錬斗SIDE

咲彩SIDE

うっわ、もう劔飛達早く倒しちゃったよ。さすが私の見込んだ人。

例の作戦を実行するにはまだ早そうだし、もうちょっと様子見ようかしら。

にしても、ウフフ…バカな男よね。私の演技に騙されるなんて…さすが私、天才女優と言うだけあるわ。

何としても私はこのバトルワールドで天下を取る。そして私を貶めたプロデューサーに借りを返さなきゃ。

「フフツ…アハハハハッ」

この恨みは消えない。絶対にね。

咲彩SIDE OUT

何ものかに取り憑かれたように笑う咲彩。

そしてこのバトルワールドとは何か…はたまた、咲彩の過去とは一体何か…謎が多すぎるこのバトルワールド。その正体はいかに…？

V5 クラウド (後書き)

バトルワールドとは一体何なのか…それはまだ明かされない…

2つの職業

「だから！俺はお前を信用してだな」

「はいはい」

どうも皆さん。天月劔飛です。「厨二っぽい名前だな」とかその辺のツツコミは無しね。

で、今口論してんのがロンと咲彩。原因はこのシラマ砂漠を東に歩いているときだった。

何せ暑いから、咲彩のアイシクルで涼しもうとしていたが、ロンは

「いや、お前の魔力が減る」と言うが、対する咲彩は「そのくらいじゃ減らないわよ」と言う。それで今に至のだ。

結構暑いのにこの2人のせいで余計に暑くなる。

「おかしいな……確か、この方角で合ってると思うんだけど……」

「何してるんですか？ 錬斗さん」

「いや、俺ら道迷ったかも……」

錬斗さんの発言で一瞬時が止まったように感じた。

そっか、迷っちゃったか……まあ、しょうがないよね。俺ら初めて来たから迷うのもうなずける。

でも、ガチでどうしよう。とりあえず近くの村……って、砂漠にそうそう村なんてないよな。

「あ、村発見」

「「ウソお!?」「」

俺と鍊斗さんとロンが咲彩の一言にツッコミをいれ八毛る。ミズナ村以外ないはずなんだが……怪しいな。そう思いつつ俺らは咲彩が言う村に行く。

さてと、まず村の第一印象はとても貧しそうだ。村のみんなが俺らを睨んでいる。どうやらここはよほど荒れているようだ。さて、この様子では俺らを歓迎なさっているようではない。

「劔飛、村の様子が変だ」

「ええ、何かに操られているようだわ」

鍊斗さんと咲彩が戦闘体勢に入り、俺もバーディアを召喚。ロンもドデカイ大剣を構える。そして村の1人が鍊斗さんに襲い掛かる。すると、鍊斗さんは躊躇なく村の1人をハンマーポイスターで叩きつけた。ちよっ！何してっ……！

「よく聞け、コイツらの正体はモンスター『スケルス』だ」

スケルス…人間に擬人して獲物を捕える。コイツの厄介なところは人間に上手く擬人して、サモナーでも見分けることが出来ない。なのに鍊斗さんは……

「おい！劔飛後ろだ！」

「えっ？」

ふと後ろを見るとスケルスが俺に攻撃をしようとしている。しまった！ボーツとしていたら後ろを取られた…っ！
くっ…そ、ここで終わりかよ！

「入江流一式 四之舞“群青催狩”くんじょうさいか」

俺の顔スレスレに矢が飛んできた。あつぶねえ…だが、今の矢が無ければ俺は死んだかもしれない。

「全く、僕が居なければキミ死んでたよ」

現われたのは黒の髪に赤い目。髪の長さは腰まである。恐らくこの娘は射手アーチャーだろう。

「速攻で終わらすよ！」

女性は5本の矢を構えて上に放つ。すると、雨のようにスケルスに当たる。すげえ、あんな的確に当たるなんて…いや、感心してる場合じゃない、俺もやらなきゃ！

「バーディア、クロスバーニング！」

翼を広げ、右、左、上、下へと十字を描くように突撃する。そして最後は炎を纏ってスケルスの腹めがけて突進。だが、数が多いのかあまり減ってない。

「もう！これじゃあ僕が1人でやったほうが数倍マシだよ！」

そう言うと、彼女は矢を取り詠唱を唱え始めた。

「風の精、私の矢に汝の力を与えよ。風の乙女『シルフ』」

矢から凄まじい風が起こる。これが、風の精霊の力…あれ？何でア
ーチャーなのに精霊を……？

「行くよ、シルフ」

『わかったわ』

！？ 今変な声が…気のせいかな？ でも、確かに聞こえたような…
しかも女性の声。咲彩、錬斗さん、ロンに聞いても知らないと言う。
やっぱり気のせいかな。

「ふうがれっしゅう風雅烈昇！」

勢いよくスケルスに向かって放つ。本当に何者なんだ？精霊を使う
わ弓は使うわ。余程の者とみる。
そんなことを思っていると、ぬっ、女性が顔を出す。

「な、なんだよ」

「キミ、僕のこと知りたい？」

「え？あ、いや…」

正直何言っているのかわからなかった。だって、敵も味方もわから
ない奴から自分を知りたいと言うのは怪しい。少し気にはなるが、
あまり気にしないほうが良い。それが安全だ。

「いや、俺は別に」

「しょうがないなあ。教えてあげるよ」

話聞いてな！俺一言も教えてなんて言っていないよ！
考えていた俺がバカみたいじゃん！

「僕の名前は入江安曇いりえあずみ。アーチャー エレメンタリスト
射手と精霊術士」

ジョブが2つ…：…どういうことだ？ジョブは1人1つのはずじゃ…
…あのレンカって奴も2つまでとは言っていないはずだ。

「知らないのかい？LEVELが30になるとジョブが2つになれるんだよ」

知らないも何もそんなこと聞いていない。いや、聞かされていない。
それから俺らは入江の話聞いて1つ気になった単語がある。

年に一回開催されている大会『Battle of battle』だ。

その大会で優勝すれば元の世界に戻れると言われている。でも、参加資格はLEVEL50以上。つまり俺らはまだ出れないのだ。これじゃあ歳を取って死んじまうじゃねえかと思っただが、ここでの俺らは不老になる。

で、この話はロン、咲彩、する知らなかった。

「俺も知らなかった。まさか、ここから出られるなんて」

長年いた錬斗さんでさえ知らなかったのか。全く、ますますわからなくなっちゃったよ。このバトルワールド。

そして、入江はこんなこと言う。

「しょうがないよ。だってハーツ大陸にはそんな情報届いてないらしいし」

ハーツ大陸？

俺が疑問の顔をしていると、鍊斗さんが捕捉するように言う。

「ハーツ大陸つつうのはこの大陸だ。この世界ではこのハーツ大陸、クローブ大陸、スペース大陸、ダイアンツ大陸の4つの大陸で成り立っている。まだまだ強エヤツはいるってこと。ま、俺はハーツ大陸を出るのは初だけだな」

なるほど、そういう事か。

何はともあれ、もうこの村とはおさらば、そして多分咲彩は…

「私たちの仲間にならない？」

や、や…

「「「やっぱりい〜…」「」」

俺とロンと鍊斗さんは声を揃えて膝をつく。うん、まあ、想像していた通りなんだけどな。で、返事は…

「無理」

はい、最悪の二言ですましたー！ しかも真顔でー！

「じゃあ、僕帰るから」

2つの職業（後書き）

今回はこれまでに登場したキャラを紹介したいと思います。

キャラ設定(前書き)

仲間になったキャラです。

キャラ設定

名前：天月劔飛あまつぎけんとう

性別：男性

年齢：17

職業：召喚術士サモナー

特殊能力：モンスター情報
モンスターについてなら誰にも負けないほど詳しい。ただし、ハーツ大陸に住むモンスターだけ詳しいので、他の大陸のモンスターは知らない。

身長：169cm

体重：60kg

髪型：カジュアルショート

髪色：えんじ色

瞳：サックスブルー

契約モンスター：バーディア（炎属性）

前：星菜咲彩ほしなさいや

性別：女性

年齢：18

職業：聖騎士
パラディン

特殊能力：大嘘
オールフィクション

彼女が演じると本当のようになる。

身長：157cm

体重：54kg

髪型：ポニーテール

髪色：水色

瞳：ダークブラウン

武器：アイシクル（氷属性）

名前：吾神錬斗
あがみれんと

性別：男性

年齢：18

職業：錬金術師
アルケミスト

特殊能力：属性追加
彼が鍛えると何かしらの属性が付く。ただし、ランダム。

身長：178cm

体重：77kg

髪型：ざんぱら

髪色：金髪

瞳：漆黒

武器：ポイズター（毒属性）

名前：ロン・ハワード

性別：男性

年齢：25

職業：剣士
ソードマン

特殊能力：馬鹿力
片手だけで大剣を振るほど力が強い

身長：188cm

体重：98kg

髪型：ツンツンヘア

髪色：金髪

瞳：青

武器：キング・リューザ（属性なし）

バラバラになった仲間 剣飛&ロンSIDE

「さて、なぜ俺はここにいるのかな？」

「……」

無視ですか…

うむう、まずはここに来るまでの記憶をたどろう。

俺らは確かミズナ村に着くには最短の道の『コクラ洞窟』に行っただけ、途中から道に迷い、練斗さん達と離ればなれになりそれから……そう、確か謎の女2人に連れ去られてここにいるんだ。

「おいつ！お前らの目的は何だ。悪いが、お前らが思っているほど金はないんだ」

「ああ、いいいいの。うちののお金目的じゃないし。うちの目的は……」

俺の前に立ってこういう。「アンタを仲間にする」と…

まさか俺がスカウトされっとはな。しかも見たところ海賊っぽいし。てか、何で山の洞窟に海賊いるんだ？近くに海でもあるのか？

「うちたちは海賊をやっている」

知ってるよ。だって格好がそれっぽいし。

「そしてウチはその海賊の船長をやっているんだ」

マジか！？ そんな風には見えないぞ！？

「でも、ウチたちはかなり弱い。他の海賊たちにも相手にされない」

いや、それは逆にいいのでは？ ん？いや、待てよ…まさか…

「民にも相手されない」

やっぱりー！！ だいたい予想は着いていたけどいざ聞くと切ない…っ！

「綾子さん、さすがにそのウソはばれるのではないのでしょうか？」

「ウソかよ！俺ガチで信じちまったよ！」

「えっ？アレを信じたの？やっすーいー」

あれ？目から水が流れてきたぞ？
でも、1つだけ気になるのがある。なぜ俺を連れ去られたのか。錬斗さんや咲彩ならまだしも俺はここに来たばかりだ。そんなに強くはない。むしろ弱いほうだと思う。

「なあ、何で俺を仲間にするんだ？どうせなら俺より強いヤツを仲間にしたほうが…」

「それはダメなんです。私たちに必要なのはサモナーなんです。他の人たちはいりません」

サモナーでないといけない理由でもあるのか？ それとも、何か企んでいるとか……

いや、考えすぎだろうか。そもそもサモナーと何の関係が

「船長！デットゴーレムがこちらに向かってきます！しかも、かなりの数で…」

1人の乗組員が慌ててこっちに来る。

それにデットゴーレム…確か、近づくヤツを容赦なく殴り殺すというモンスター。しかし、それはヤツらの縄張りに入った時のみだ。普段は大人しいと聞いたことある。

「なんだって！急いでデットゴーレムを」

「待てよ」

俺はデットゴーレムのところに行こうとする船長を止める。少し聞きたいことがあるんだ。デットゴーレムに関して。

「な、なによ」

「お前さ、デットゴーレムに何かしたのか？」

「っ…」

よし、動揺した。何か隠しているな。この調子で追い込めば…

「キヤー！」

デットゴーレムが1人の女性を殴りかかろうとしたその時。

「麻美！」

「え？」

「これからコイツらを倒す。そのためには仲間の名前を知る必要がある。違うか？」

「……………」

劔飛SIDE OUT

ロンスIDE

たく、劔飛のヤツどこにいったんだ？ 先に走っていったとたんに姿を現さなくなっちゃまって……………」

「プレイボール……………」

「っ！？」

弾丸が飛んできた…………？ しかも、物凄い速さで……………」

「っ！誰だ？」

ギリギリで避けた。あ、危ねえ……………」

「……………」

現われたのは女性。

何で女性がこんな危なっかしいところに…………？

「あまり動かないで、狙いが定まらない」

「んのやろっ」

久々の強者だ。何が目的かは知らんが、俺の前に現われたのが運が悪いつてことを教えてやる。

「たああっ!!」

横に大振りをするが、フツと下を見たら女性が待ち構えていた。チツ、躲すには距離が足らねえ。どうする…??

「これでゲームセット…」

どうする! 否っ。

「跳ね返す!」

「え?」

女性が放った弾丸を見事跳ね返した。

……久々だ。こんなに燃えるのはっ!

「なあ、名前聞いてもいいか?」

「……?」

「俺の流儀はまず名前を聞いてから倒すんだ。っと、俺の名前は口ン・ハワード。よろしくな」

「瑠璃……水原瑠璃」

「そうかい。なら、遠慮なく行くよ！」

瑠璃が2丁のハンドガンをガンガンと放つ。だが、俺の大剣にやかなうはずない！

「せえええええやあああ！！！！！」

キング・リューザを上手く使って瑠璃のハンドガンから放たれる弾丸を避けるが……

「ぐあっ！」

な、何でだ？ 確かに弾丸を避けたはずだが…

「瑠璃の弾丸は自分の思い通りに動かすことが出来る」

思い通りに、ねえ。

やるじゃん。俺もますます燃えてきたぜ！ 絶対え倒す！
そう思い瑠璃に斬り掛かるが

「遅い……」

「ガハッ！」

くっ…前衛と後衛じゃ差がありすぎるっ！ どうすれば…

「瑠璃に勝てるはずない」

ハッ、言ってくれるじゃん。んなこと言われちゃ本気を出さなきゃいけないようだな。

見せてやるよ。俺の本気をつ！

「リミット解除“レベル3”」

バラバラになった仲間 劔飛&ロンSIDE (後書き)

さてさて、ひょんなことからバラバラになった仲間たち。一体どうなるのか…？

仲間と咲彩の秘密

「リミット解除“レベル3”」

そういうとロンは大剣を置いて、詠唱を唱え始める。すると、ロンの武器『キング・リユーズ』が変化し始めた。その変化した大剣はかなりごつくなっていて、切れ味も良さそうである。

「……瑠璃に勝てるはずない」

「そりゃやってみないとわからないもんだ、ぜ！」

ロンが一振りをする、大地が割れ始める。地割れだ。大地を揺るがしといて、相手の隙を突く。

だが、それを読んでいたのか、瑠璃は石の上に移動する。

「暗殺は素早さが大事」

「でもよう、逃げてちゃ殺せねえぜ」

「……っ！」

気が付いたらすぐ後ろにいるロン。そしてロンは大剣を振り上げ……

「ぬおおおおっっ！……！！！」

瑠璃が「もうダメだ」と思ったとき、自分の体に斬られた感覚がないのに気が付く。なぜならロンは大剣を寸止めをしていたからだ。

瑠璃の頭にはハテナがあるみたいに呆然としている。それはそうだが、自分を殺そうとしているヤツを殺さないなんておかしい。だが、ロンは違う。殺さないんじゃなくて殺せないのだ。優しい心の持ち主のロンは殺すなんて到底無理。

「瑠璃が生きていればあなたを殺すかもしれない」

「なら俺は殺されないように生きる」

「瑠璃が死ねばあなたは幸せになれる」

「人が死んで幸せになれる人はいない」

暫し2人は黙り込んで10分が経過をしようとしていた。最初に声を上げたのは瑠璃だ。瑠璃が言った言葉は意外な言葉であった。

「瑠璃も……」

「？」

「瑠璃も生きていいの？」

「当たり前だろ？誰も拒まないさ」

「瑠璃も、ロンと一緒に生きたい。瑠璃を救ってくれた命の恩人と一緒に……」

「来いよ。俺らと一緒に来たら絶対エ面白エぞ」

「うん」

そして劔飛と綾子は…

「行つたよ劔飛君！」

「了解です、綾子さん」

デットゴーレムと死闘し続ける事早1時間。綾子と劔飛はデットゴーレムを追い詰めるようになった。

「バーディア、アイツの足下に向かってブレイクファイアッ！！！！！！！！」

炎の不死鳥になったバーディアはデットゴーレムの足へと飛んでいく。

それも素早い動きで。

それに追い付けないデットゴーレムは、よろけて転ぶ。それを見逃さない綾子はすかさずトライデントで攻撃。

「今よ！」

「おしっ！」

綾子の合図で劔飛は詠唱を唱え始める。

そしてデットゴーレムは魔法陣の中に吸い込まれる。成功だ。

「はあ、はあ………」

「お疲れ様」

「お疲れ様です。綾子さん」

ハイタッチをしてその場を去る2人。

場所は移って洞窟の地下。そこには1人の男性と女性が睨み合っている。

「そこを退いて貰えるかしら？」

「断る。俺はお前を倒す」

「何で私なのよ！」

「それはお前がここにいるからだ」

男性は咲彩に近づきそう言う。

「は、はぁ？何言ってる」

咲彩が言い返そうとしたら男は斧を振り下ろす。

間一髪で避けた咲彩はアイシクルで男を斬り裂く、が。斬った感覚がない。フツと上を見ると男が斧を構えてニタ、と笑う。

「っ！」

急いで防ごうとする咲彩。防いだはいいが、男の一撃がスゴく重い。

「お、重い……」

「ハッ！」

さらに力を入れるとまた重くなる。
それに耐えきれなくなった咲彩は左に回避して攻撃を流す。

「やるじゃん」

「ありがと。でも私、急いでいるからアンタの相手をしてるヒマはないの」

「言っただろっ？お前にはなくても俺にはある」

「……そう、なら仕方ないわね」

お互い再び武器を構えまたジリジリと睨み合う。
最初に動いたのは咲彩だ。

「ハアッ！セイッ！」

斬り上げ、落ちてきたところを横に溜め斬り。

「ぐうっ……！」

男の武器 断頭斧でなんとか防ぐ。

「……アンタ、名前は？」

「俺ア尋^{あかねじこ}。赤根尋^{あかねじこ}つてんだ。お前は？」

「私は星菜咲彩」

「そうか。まあ、どうでもいい。とりあえずお前をぶっ飛ばす！」
そして場所は変わって洞窟出口付近。ここも男と男が火花を散らしている。

「てやああああっ！！！！！！！！！！」

「はああっ！！！！！！！！！！」

ハンマーと槍がぶつかり、金属音が洞窟内を響かせる。

ハンマーと槍…素早いのは槍の方だ。だが、攻撃・防御とくればハンマーの方が有利。

「……………」

無言で槍を突きまくる男とそれをハンマーで必死に防ぐ錬斗。

「くっ、速エ…まるで矛先が見えねえ」

「トドメー！」

最後の渾身の突き。結果は……

「あつぶねえ……」

ハンマーで防ぎ、何とか身を守った錬斗。

その後錬斗は男との勝負に勝って、ある事言っ。

「俺の名前は吾神錬斗。お前は？」

「名前なんて聞いて」

「俺とお前は戦った。そして友達になった」

「ち、ちよっ！どついう理屈だ！」

錬斗はなぜこのようなことを言ったのか。

それは錬斗の頭の中では『ケンカ＝友達』という風になっているからだ。

錬斗はバトルワールドに来る前はケンカ好きの不良なので、この考えが正しいと思っている。

「たく〜、友達って言われても何すりゃ…」

「俺らの仲間になる。ただそれだけだ」

「友達…」

ニコリと笑う錬斗に対して男は少し間をあけてから「おう」と二言で返した。

そして場所は戻って咲彩と尋。

数分間2人は激しい防功をしている。攻めたり防いだりの繰り返しだ。

「はあ…はあ…アンタ、そろそろくたばれば？」

「冗談。諦めるのはお前だ」

「嫌よ。私は…アンタを倒して…劔飛と…」

「ふん、スパイのくせに何を」

「っ!?!? 何でそれを知ってるのよ!」

暴走

「何で……私の目的を……？」

「バレバレだつつうの。単にアイツらが鈍感なだけだ」

そんな……私の計画が……

…殺す。あの男を殺してやる!!!!!!!!!!

「お前の狙いは天月劔飛の首を刎ねること。違うか？」

「……いいわ。アンタを殺してこれをなかったことにする」

「やれるもんならやってみろ。俺はそう簡単にいかない」

「はあああああ……!!」

「うおおおお……!!」

ガキンと金属音が響き、交戦が始まる。

こいつは殺して……

殺して……

そして……

劔飛を殺す！

「いい殺気だ。だが、まだまだ」

高くジャンプして斧を振り上げる。よし、避けれるスピードだ。

「そこっ！」

「がっ」

い、いつの間にも後ろに……？

確かに相手は上に居たはず。なのに何で後ろに……
フ、フフフッ……

「アハハハハハ」

「ようやく本性を現わしやがったな」

「いいワ、あなたも殺して劔飛も殺ス」

咲彩SIDE OUT

尋SIDE

な、何だこの悪寒は…！ とてつもなく邪悪なオーラだ。先ほどの殺気より凄まじい。

しかも身体から赤い線がいくつも入ってる。これは覚醒か？ いや、それにしても身体に変化しすぎている。これは暴走だ。早くなんとかしないとコイツは……

そう思っていると、後ろから熱気を漂わせているのに気が付く。その正体とは……

「バーディア、あまり大きすぎると咲彩にも被害が加わる。少し抑えて」

「クキュー」

天月劔飛……何でこんなところに…？

「話は後だ。今は咲彩の暴走を止めるのが優先だ」

「お、おう」

そうだ。今はコイツの暴走を止めるのが最優先だ。とやかく考える暇はない。つつても、コイツが欲しいのは天月劔飛の首。天月劔飛を危険に曝すのはあまりにもひどい話だ。

「ま、先にコイツの暴走を止めないと話が進まないな。ハッ！」

断頭斧で真上から切り裂く、が。星菜咲彩は自分の大剣で防ぐ。なるほど、一筋縄じゃないか。それに、少しだがパワーも下がり始めている。いけるかもしれないな。

「劔飛君っ！」

「綾子さん!？」

そう名前を呼ぶものは海賊服を着た女性。その女性はトライデントを持っていて、なぜか俺を見ている。うーむ、彼女に何かしたかな？ 記憶に無い。

まあ、考えるのは後にしよう。それより……

「ウウツ……」

まだ治まらないとなると、手段は1つしかない。星菜咲彩を倒す。それを天月劔飛達にも伝えるが、「仲間だから倒せねえ」と言っこの方法を拒否した。ま、そりゃそうか、天月劔飛と星菜咲彩はパートナー。仲間を失いたくない気持ちも分かる、が。今のアイツは何を言ってもどうしようもない。助かる方法はあるが、確率的に低い。どうする……？

「どうするもなにも、俺は咲彩を助けだす」

「無理だ! 助かる方法はあるが、確立が低すぎる!」

「でも、あるんだろ?」

「……」

言うべきか? いや、言わなくちゃならないな。

「それは」

言い掛けたとき、星菜咲彩の大劔が目の前に来る。チツ。

「な、なんだとっ!?!」

全く、バカというか何というか。ま、多分そんなバカだからこそ惹かれたんだろう。

「さて、反撃をしないとな」

断頭斧『パニツシャー』を地面に置いてある詠唱を唱える。一応初心者用の詠唱覚えてよかったよ。

「何してんの?」

「睡眠魔法の詠唱だ。コイツを一時的に眠らせて夢のなかへ突入する」

「そ、そんなこともできるの?」

「ああ、だが、眠らす時間は少ないがな」

「でも、もし誰かがあの娘の夢のなかにならどうなるの?」

「死ぬな」

「そんな……」

「その時が来たらまた眠らせる」

そう、なかに入るのは2人。つまり天月劔飛とあの女だ。

「私も残るよ」

「な、何言ってるんだ!」

「あなたは魔法に集中して」

なかに入るのは天月劔飛だけ……って言うことか。

「天月劔飛! 聞いてたか?」

「もちろん!」

「よし、展開するぞ!」

天月劔飛……頼むぞ。

暴走（後書き）

さてさて、今日は覚醒と暴走について説明していききたいと思います。

暴走……覚醒を一定以上到達すると暴走する。

止める方法は倒すか眠らせ夢のなかへ行って魔夢を倒す。

覚醒……成功すると全ての能力が上がるが、失敗すると上記のようになる。

サーヤの過去（前書き）

今回は謎だらけの咲彩の過去です。

サーヤの過去

さて、咲彩の夢の中に入ったんだが……なんかスゴいことになってるな。一言で表すなら少しファンタジックだ。俺の予想とは違う。そして俺は無数のドアがあることに気が付く。この扉って一体……

『こりゃあ星菜咲彩の記憶だな』

突然頭に流れる声。しかも聞き覚えがある。つーか、咲彩の記憶って……

『言葉どおりだ。だが、あまり探索してやんな。プライベートっつうのがあからな』

「あ、ああ」

少し歩くと『オーディション』と書かれたドアがある。どういう意味だ？

心臓がバクバクする中ドアを開く。刹那、光が俺を包み込み、ある記憶を映し出す。それは幼い頃の咲彩であった。何が何だかわからないが、見てみることにした。

『うう〜……緊張するよお〜……』

『大丈夫、咲彩なら出来るわ』

『うん！』

どうやら何かのオーディション会場らしい。そして咲彩を慰めてい

るのは母親か？ 何か優しそうな母親だな。ん？ あそこにいるのは母さん？ 何でこんなところに………待てよ？ 小さい頃うちの母さんはどこかに出かけてくるって言って確か……

『杏』

『昌子！ 来てくれたのね？』

昌子とは俺の母親、そして杏とは恐らく咲彩の母親のことだろう。でも、母さんの様子が変だ。何か暗いような……

『杏………』

『んー？』

『死んで』

『えっ？』

ぐさりと生々しい音が聞こえる。ちよっ………母さん何して

……あの時か………母さんが突然いなくなったのは………

母さんは咲彩の母親を殺し逃走。なんつう親だ。いや、そうじゃないな。咲彩はさぞかし俺を恨んでいるだろう。

「俺は母さんの代わりに罪を償う。それが最善」

『バカ考えてるんじゃない！ お前が死んだところであいつは救われない』

「じゃあ……俺にどうしろと？」

『…………』

「あいつは俺に恨んでる。なら、あいつが望むことをしてやるのが」

『お前、何であいつがお前の仲間になったか知ってるか？』

仲間…………どうせ俺を殺そうとしたんだろう。だから俺に近づくようにと…………

『昔はな。だが、今の彼女の考えは違う』

「それはどんな風に？」

「さあな」

そうか、あまり気にしすぎないって事が。

俺はとりあえず進むことにした。

少し歩くと光が見える。やっと出口か。何かスゴいものを見ちゃったから気が進まない。

「あらあら？」

後ろを見るとお嬢様っぽい格好をした女の子が俺に近づいてくる。何だ？ 彼女の後ろに黒いものが…………

「何モンだ！」

ここに入れる者は俺しかないはず……なぜ見知らぬコイツがっ！

「私は宇鍊うねり 刀香トウカ。ただただ強者を求める者ですわ」

ま、マズイっ！ この殺気は只者じゃない！ 足が……震え……て

……

「ザコには用はありませんわ」

スツと俺の前を通り過ぎる。び、ビビった……

でも、何だったんだろ。ザコには用はないって言ってたけど、何かあるのか？ いや、あまり深く考えないほうがいいな。それに、戻ったら咲彩に何て言うか……

『天月劔飛、そろそろ戻ったほうがいい』

「え？ でも、咲彩の中の魔夢を倒さなきゃいけないんだろ？」

『もう解決した。早く帰ってこい』

「あ、ああ」

意識を無にする。すると、目を開けるとそれは見に覚えがある場所。良かった、元の場所に戻って。

「あ、そうだ。咲彩は！？」

「まだ寝てるわよ」

「そっか……」

良かった。

しかし、いきなり解決したって……やっぱりあの宇鍊ってヤツが関係しているのかも。あの殺気は尋常じゃない。またいずれ俺らの前に来だろ。それまでには力をもっと付けなくちゃな。

「頑張れ、劔飛君！」

「ちょっと、頭をクシャクシャするのやめてください！」

「むう、何よもう」

今現在ここにいるのは俺と咲彩、ロンと鍊斗さんはどこにいるんだ？ 早く見つけださないと先に進まねえ。

「お、いたいた」

「やっと劔飛達に会えた」

その声は……鍊斗さん！ ロン！……達の後ろにいるのは誰だ？

「……誰？」

「俺の仲間、天月劔飛と星菜咲彩。時に劔飛」

「ん？」

「そのお美しい女性は誰だ！」

「ロン……こっちに来て、ちょっとお話が……」

「あつ、ちよつ、あー！ー！ー！！！！！」

あ、どっか行つた。まあ、じきに戻ってくるだろ。生きていれば……

「何だ何だ、結構賑やかになつてるじゃねえか」

「あまりうるさいのは好きじゃない」

「ま、そうカツカするなや」

錬斗さんともう1人のがこちらにくる。誰だ？　なんかスゲー仲良さそうな感じがするけど。

1時間後、ロンは無事に帰ってきた。良かった、死んでなかった。あの女性からの視線は、死を招きそうな感じがしたから心配した。

「さて、みんな戻ってきたから自己紹介をしようか」

1人の男。そついや名前知らなかったな。

「俺の名前は赤根あかね 尋ヒロ。死刑執行人だ」

「水原みずはら 瑠璃ルリ……暗殺者アサシンと射撃手スナイパー」

「私は志木しぎ 綾子アヤコよ。職業は海賊バイレーツ。よろしく！」

「伊達だて 魁吏カイリ、槍兵ランサーだ」

それぞれ自己紹介をし、俺らもする。そして早速ある話をする。そ

れは綾子さん達が仲間になるのか。

綾子さんは仲間になるとか言ってたけど、他の人はどうなるんだ？
もし、仲間になってくれるならどんなに心強いことか。

「瑠璃はいつでもロンと一緒に」

「おいコラ！ 離れろ！」

仲が良いものだ。

「私も劔飛君が心配だし」

そう言つて俺の頭をクシャクシャする。ホントに俺の頭好きなんだよな。綾子さん。つーか、俺が心配つてアンタは俺の母親か！ 24歳でしょ！

「俺なら仲間になる」

「俺もだ」

お、まさかこの2人が仲間になってくれるなんて。こんなにも心強いことはない。

「あ、そうそう劔飛君。この先は船を出す必要があるんだけど……
私たちの船使つ？」

「え？ でもそれってミズナ村に着かないんじゃ……」

咲彩の言つとおり、ミズナ村はこの洞窟を抜けて少し歩いたら着く。そう聞いた。いや、そうじゃなかったらこの地図は一体何のために

あるのか。

「んー、じゃあその地図がもし、足止め用だったら？」

その言葉に皆は固まる。そうだとしてみんなで？ なぜそんなことを？ まるでここから出ないようにしていきりみたいだ。

「とりあえず私たちの船に移動よ。話はそれから」

こうして俺らは4人も仲間にした。これからどうなっていくやら。

サーヤの過去（後書き）

何か質問や感想が書いてください。

呪いと魔導士と錬金術師

綾子さんの船に乗ってから10時間。やっと、ミズナ村が見えてきた。結構長い道程だったな。でも、ここがゴールじゃない。

「ねえ、劔飛」

咲彩に呼ばれ、船のデッキへ出る。用はやっぱりあの過去のことか？ いや、咲彩は俺があ過去のを見ていたの知らない。なら何の話？

「アンタさ、私の過去見たでしょ」

ビンゴ！ じゃなくて、何故そのことを知っているんだ。誰かが話したのか。

「尋から聞いたわ。私を助けるために私の過去を見た。そして、私はアンタを」

「ストップ」

咲彩の表情が暗い。俺は本来見てはいけないものを見てしまっている。まず俺から謝るのが道理だ。

「すまない！」

俺の謝りに目がキョトンとする咲彩。どんなに思っつていようと知ったこっちゃない。今の俺には謝ることしかない。それが今俺の一番の出来ることだ。

「え？　ちよつ、何で劔飛が謝ってんのよ！　謝るのはまず私からよ」

そう言つて頭を下げる。

「ごめんなさい。私が寝ている間、夢の中でお母さんに会つたの。それでね、お母さんがこう言つたの『私は悔やんではないわ、だから劔飛君に復讐するのは止めなさい』。それで分かつたのは、復讐は復讐を生むだけ、何も解決してはいない。そう思うと、何だか自分がやっていることがバカらしくて……」

咲彩……

「でも、これでスッキリした。ありがとね」

その時の咲彩は涙ぐんでいた。俺の母親が咲彩の母親を殺した事には変わりない。せめて何か償わせてもらわないと俺の気が進まない。咲彩に頼んでみると、意外な台詞が返ってくる。

「ずっと……私の傍にいなさい」

少し恥じらいながら言う咲彩に不覚にもドキツとしてしまう。

「咲彩……」

ずっと……咲彩は1人ぼつちだったんだ。

そして俺も1人ぼつち。

多分、俺らは誰かに甘えたりしたかった。なら、俺が居よう。そうすれば咲彩も俺も1人じゃなくなるし。

「分かった。ずっと一緒にいる」

どこまでも、な。

「着いたわよ。ここがミズナ村」

船のイカリを降ろし、ミズナ村に入ろうとした瞬間。何者かが仁王立ちをしている。コイツは一体……

「ここは神聖なる場所。ここに入るとは許さん！」

槍も持っているし、ここを守るものかな。槍には遠距離だ。

「バーディ」

「俺がやる」

俺がバーディアを喚ぶ前に魁吏が一步前へ出る。そうか、やっぱり槍使いには槍使いのスゴさがあるのか。

「じゃ、俺が立会人になろう」

鍊斗さんが手を挙げる。俺らが見届け人ってことか。

「両者前へ………始め！」

最初に動いたのは魁吏だ。

魁吏は槍の矛先を上に向け構える。

「仙竜………」

静かに前かがみの態勢にする。

「疾晃！」

そして、風のごとくに相手に刺す。しかし、相手は高くジャンプして躲す。それは俺に見えないくらいに素早く。

「そんな……俺の攻撃が躲されるなんて………」

「蒸真深裂！」

上から下へと突く。敵ながらあっぱれだが、魁吏はその上のスピンドを上回る。

「心臓必中。爆閻針！！！」

出た！ 魁吏の能力 心臓必中。その能力を使ったら必ず心臓を貫ける。1日2回つてのは玉に瑕だが、これに勝るものはいない。

「やつ……べえ………」

運良くも相手は空中。空中では身動きはとれないはずだ。

「うおおおお……！！！」

相手の槍は弾かれて、その相手は……

「はあ……はあ………」

ギリギリ避けたみたいだ。

「勝者、伊達魁吏」

相手は動けない状態。よってこの勝負は魁吏の勝ちで。

「すみマセンでしたあー！」

ここは海賊や盗賊に襲われる事が多いので、勘違いのようだ。しかも土下座って、公共の場でよく恥ずかしくないよな。

「それより」

「あ、名前は時原ときはら 成ナルツス！」

名前じゃねえよ。と、みんな心の中で思っているはず。

「名前じゃなくて、ここについて教えてほしいんだけど」

魁吏に言われ、渋々話す。

「さっきも言いましたけど、ここは海賊・盗賊に狙われやすい場所です。何故狙われるようになったのかは、少し意味不明なんス。『8000年前にある呪いを仕掛けた。その呪いを解きたければ錬金術師を呼んで解け』と言い伝えではこうなってます」

「錬金術師？ 何で錬金術師？」

成の説明に鍊斗さんが反応する。そりゃそうだろう、鍊金術師なんてそこら辺にいるだろうし、大体呪いを解くのに何で鍊金術師……そうか、だからか。

「なあ、何か分かったのか？」

尋の問いに俺は説明するように答える。

「鍊金術師……つまり、呪いを掻き消すための武器を作ったことだ」

「なら、魔導士と協力すれば？」

「綾子さん、俺らのパーティに魔導士はいないよ。確かに、魔導士と協力すればより最強の武器を作れるかもしれないが、運悪くこのパーティには魔法系統がない」

「んで、どうするんだ？ 鍊斗だけじゃキツいんだろ？ なら探しやすいじゃん」

「ロン、簡単に言うがこの世界は広い。ましてや魔法系統と言う範囲は小さすぎる」

鍊斗さんの言うとおり、俺はこの世界に来たばかりだが、長年この世界にいる鍊斗さんの意見を尊重したほうが得策かもしれない。でも、このままにしてはられないし……

「皆さん、何してるんですか？」

ピョコンと小さい顔を出す。誰？

呪いと魔導士と錬金術師（後書き）

さてさて始まりました新章 ミズナ村の呪い編

彼女は一体誰なのか……？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8845u/>

BATTLE WORLD

2011年10月12日07時12分発行